

# 地域に根ざした場所 わたぼうし

## 活動先:生活支援センターわたぼうし

### 1. 活動先紹介

生活支援センターわたぼうしは、従来の社会福祉制度に捕らわれない場所を作りたいと、2002年法人格を取得し、活動を開始。半田市花園町にあり、学童期児童の豊かな放課後生活の場作りとして学童保育事業、学童デイサービス（自立支援法）を中心に活動を行っている。

活動理念として、「年齢や障害の有無で生活の場が区別されるのではなく、誰でも暮らしなれた地域で共に生活していける社会を目指し活動を行い、その社会づくりのために、子ども時代から共に経験し、学び、育ちあっていく場所として学童期児童の放課後支援を中心とした事業を行う。」ということ掲げている。

その他、大きな行事として8月（夏休み）に、お出かけ（プラネタリウム・映画鑑賞・名古屋市科学館 等）、プール（小学校のプールを借りてプール遊び）、わたっこ祭り（子どもたちが作るお祭り）、子どもキャンプ（高学年の子供たちだけのキャンプ）などがあり、子どもたちが楽しめ、学びあっていく環境を作っている。普段は、公園に行ったり室内での毎日の遊び、取り組みがある。

### ○わたぼうしの名前の由来

わ・・・わきあいあい  
た・・・たのしく  
ぼ・・・ぼくとわたしと  
う・・・植える  
し・・・しあわせ



### 2 当初の活動目的や目標

#### ○活動目的

・自分たちで計画し、実行する力を養う

今まで自分たちで1から計画を立てたことがなかったので、空の科学館やお菓子作りの計画を立てる中で、その計画が実行できるまでの過程を学び、今後につなげる。

・学童保育の現場を自分の目で見て学ぶ

講義では、「少子化や」地域との関わりが希薄化していると学んだが、現状はどうか実際の現場で学ぶ。

### 3、自分たちの活動内容

私たちは、自分たちで計画し実行する力を養うことと、学童保育の現場を自分の目で見て学ぶことの主に二つの目的を持ち、以下の活動を行った。

#### 1) お出かけ…空の科学館

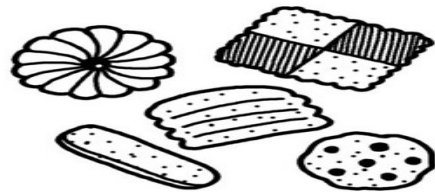
目的地まで集団で歩いていくことで、地域に子どもたちがいること、わたぼうしという学童保育施設があることを知ってもらえる機会になること、また集団行動をすることで子どもたちに社会性を身につけてもらうことを目的に、夏休みの一つの思い出になるのではないかと思います。お出かけを計画した。



…地域にある公共の施設を子どもたちに知ってもらうため、施設と同じ半田市内にある空の科学館を選択した。親御さんも含め、子どもたちに配布する“お出かけのお知らせ”から作成した。当日はとても暑く、子どもたちの体力も奪われ自分たちが下見で行った時とは大きく時間が異なってしまったが、空の科学館では予想以上に子どもたちが喜んでくれた。

#### 2) お菓子づくり<クッキーづくり>

学童ならではの“学年を超えた交流の場”を重視して、年齢や学年に関係なく一つのものをつくりあげる中で、困っている子を助けてあげるなど、互いに協力し合い協調性がうまれるのではないかと考え、お菓子づくりを計画した。また、現代の子どもたちの性格や傾向を、お菓子づくりを行っている子どもたちの様子・行動から学びとれるのではないかと考えた。



…お菓子づくりは、作り方が簡単なクッキーを選択した。材料を混ぜるだけにして、作手順を説明する模造紙も用意したので、簡単に出来ると思いこんでいたが、子どもたちには30分分割することが難しかったり、手が小さいため上手くこねられなかったりして思った通りにはなかなか進まなかった。クッキーを焼いている間は、「買い物ゲーム」や「後出しジャンケン大会」、「もしかめゲーム」などのレクリエーションを行った。

この他にも、キャンプ、夏祭り、プールなどわたぼうしさんの夏のイベントにも参加させていただいた。その中で、自分たちの子ども時代との違いを比較したり、地域（小学校

など)との関わりを知ることが出来た。

#### 4. 活動における問題点・課題

活動の中で、自分たちが計画したクッキー作りにおいて、準備が足りなかったという問題が挙げられる。当日までに子どもたちと接した時間が短かったという点もあるが、子どもたちがどれほどの理解力を持ち、どれほどできるのかわからなかったために、作業がスムーズに進まなかった。自分たちの説明の仕方では子どもたちには理解してもらえず、職員さんに手助けしていただく形となってしまった。自分たちだけで行ったリハーサルと、実際の子もたちとは、作業にかかる時間や周りの環境が違うことをしっかりと把握できていなかったことが問題点であった。



また、子どもたちが何か悪いことをしたときの注意の仕方について、課題があげられた。職員さんたちと子どもたちの間にあるような信頼関係が自分たちには築けていない中で、どのように注意したら子どもたちは聞いてくれるのか、とても難しく感じた。職員でもなくボランティアでもないサービスラーニングという立場で、子どもたちとどう関わっていくべきだったのか、課題が残った。

#### 5. 活動を通して学んだこと

活動を通して、受身な姿勢になるのではなく、自ら積極的に行動し、発言・提案することが自分たちのため、活動先のためにも必要だと学んだ。計画は、自分たちが考え、動かなければ何も始まらないし、活動先にも迷惑をかけてしまうことになる。できるだけ早めに行動し、計画は活動先に何度もチェックしていただいたことで、余裕をもって計画の準備をすることができ、計画が不備な点は修正することができた。

しかし、職員さんとの振り返りの中で、活動中に質問がないということ指摘された。自分たちは活動に精一杯で、周囲をみる余裕が持てなかったためだと考える。常に問題意識を持ち、活動することが大切であると学んだ。

6日間の活動の中で、低学年と高学年には大きな差があることを学んだ。その中でも、理解力については全然ちがうということ学んだ。前述したクッキー作りの中でも、高学年の子たちは一度の説明で理解してくれたが、低学年の子たちにはなかなか理解してもらえなかった。あたりまえのことかもしれないが、自分たちはそれをしっかりと理解できていなかったように思う。職員さんには、高学年に向けた説明の仕方ではなく、低学年に向けた説明をしなければいけないと指摘していただいた。児童についての知識も事前に勉強しておくべきだと学んだ。

活動を終えて感じたことは、サービスラーニングの活動には本当に多くの方々にご協力

していただいたからこそ実現できたということである。自分たちを受け入れてくださった活動先の職員さん、子どもたち、親御さん、関係者の方々、大学の先生方、先輩方、みなさんのご協力おかげである。活動をするために、みなさんの力をお借りできたことを、深く感謝する心を忘れてはいけないと学んだ。

## 6. 活動先への提案

### ①わたっご飯

わたぼうしでは、お弁当を持参する子どもたちもいたが、わたぼうしのスタッフさんが作るわたっご飯を食べる子どもたちも多かった。わたっご飯は、全てスタッフさんの手作りであり、出来立てのご飯を食べることが出来る。朝忙しくて、お弁当を毎日作ることは困難な親にとって、わたっご飯はとても有難いものなのではないかと思う。これから先も、わたっご飯を続けていってほしいと提案する。

### ②わたっこまつり

わたっこまつりは、準備から本番まですべて子どもたちが行っている。このように準備から本番まですべて子どもたちが行う行事は少ないと思うので、子どもたちにとってとても貴重な経験ができ、また終わった後には達成感を得ることが出来るのではないだろうか。当日は、他の学童の子どもたち、地域の人々などに関わることができ、多くの人々にわたぼうしを知ってもらえる良い機会だと思う。よって、わたっこまつりをこれからも続けていってほしいと提案する。

## 7. 今後の研究テーマ

私たちは今後、日本とスウェーデンの学童保育について調べる。日本の学童保育の現状と課題、スウェーデンの学童保育の現状と課題をグループ内で分担し、論文を用いて研究する。

## 参考文献

- 新保 幸男, 2010.4, 「学童保育の現状と課題 (特集 学童保育の課題)」『教育と医学』 58 (4), 330 - 335
- 泊 唯雄, 2010.2, 「学童保育はいま」『福祉のひろば』 119, 28 - 34
- 三枝 麻由美, 2009.6 「スウェーデンの放課後対策の特徴と日本の政策への示唆 (特集 諸外国の放課後対策--学力低下と学童保育問題へのアプローチ)」『Business & economic review』 19 (6), 38 - 49